



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail : daimao@travelmitra.jp)

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

ぼん子画

「満月四人組デカン高原の旅Ⅲ 親不孝者よ①」

2月1日と「奇跡」とわが輩に、どのような関係があるのか。

「奇跡」を辞書で引くと「ありそうもない不思議なできごと」とある。

キリスト教的には、神や超自然的なもの、人間の力を超えたできごと、とされる。

この場合は「神」の存在がなければならない。

キリスト教徒ではないので、わが輩には「奇跡」は起こらない。それなら、あの不思議なできごと、奇跡と呼んでもよいできごとが、どうしてわが身に起こったのであろうか。分からない！

ジャイナ教の教えなら、説明ができるかもしれない。

(読者諸氏よ。もう一度教えを思い出していただきたい)

「ある人では、奇跡はある。ある人では、奇跡はない。ある人では、奇跡はあり、またない」と前述した。

キリスト教徒であろうが、仏教徒であろうが、ある人にはあるし、ない人にはない、ということになる。

わが輩にはあるが、読者諸氏にはない。ただそれだけである。

インドにいるとき、しばしばこのような現象が起きる。どうして、わが輩にだけ、そのようなことが生じるのであろうか。

この意味を考えることが、奇跡のナゾを解くカギになるかもしれない。

そろそろ、2月1日の意味を明かしておかねばならない。

わが父の命日である。旅のことばかりに気が入って忘れていた。亡母のことは常に想っている。母はかけがいのない存在である。では、父はどのような存在であったであらうか。

最近オヤジの気持ちが、痛いほど分かる。わが愚息・韋駄天が会社を辞めて一年になる。独立起業するなど高邁なことを言っているが、なんのことはない、未だにフリーター状態である。心配の種が尽きない。

「親不孝者よ！」

愚妻が反論した。

「おとうさんだって同じだったでしょう！」

(うー、沈黙)

愚息は二十七才で離職した。わが輩がサラリーマンを辞めたのは二十九才であった。

「辞めてなにをするだー」(但馬弁)

あれこれとオヤジを言いくるめて再びインドに行ってしまった。いいや、言い包めるほどの会話はなかった。言いたくても伝えるコトバを持たなかった無学なオヤジは、すでに七十歳を越えていた。なんという親不孝な息子だろうか。

今回の奇跡を起こしたのは、もちろん「神」ではない。仕掛け人はオヤジだ。

「やっと、おれの心配苦勞が分かったか。ばか息子よ」

というわけである。神はいないのに、あの世にオヤジがいる、というと訝る読者諸氏がいるであろう。しかし、ジャイナ教なら説明がつく。

ジャイナ教では創造主（神）は認めない。それなら人が死んだらどうなるのか。身体は灰になり意識は消え、死んだらお仕舞になってしまうのか。

アートマンのような形而上学的な「不滅の魂」とは少し違うが、原初的な魂（個我）のようなものを認めている。わが輩が死ねば、魂は上に昇って漂うことになる。つまり、上の世界には父の魂が漂い、母の魂が漂っている。それらは別個の魂である。天界には人間の数だけ、魂たちが漂っているのである。

中国の思想に似ている。ちなみに靈魂が下界に向かう時、下りてくる場所が位牌である。

オヤジが下りてきて、わが輩にオヤジの苦惱を知らしめたのである。

2月1日は、そのような日である。

今回は、本当に最終章です。どうしてわが輩だけ、奇跡のような不思議な現象が起こるのか、その意味をこじつけて考えてみたい。